

令和5・6年度 板橋区青少年問題協議会 第3回全体会

開催日時 令和7年3月19日(水) 午後6時30分～
開催場所 区立グリーンホール 2階ホール

出席者

[illegible]

出席職員（幹事）

産生	業活	振支	興援	課課	長長	藤渡	原辺	仙五	昌樹
子指	ど	も導	政	策室	課課	吉富	田	和	有己
成地	増域	涯教	習力	ン推	タ進	的高	野木	信翔	一平

【開会】

・会長あいさつ

【議事】

坂本会長（板橋区長）

それでは、次第に沿って進行させていただきます。はじめに「（１）提言（案）について」「居場所検討部会」で部会長をしていただきました児美川副会長から説明をお願いします。

児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

よろしくお願いいたします。それでは、提言案について説明させていただきます。お手元の提言案をご覧ください。

表紙を送っていただきますと、「はじめに」とあります。本青少年問題協議会の設置や性格について記載しております。

次に、１ページ「第１章 令和５・６年度の協議テーマについて」では、今回、令和５・６年度の協議テーマとして不登校という問題を取り上げるに至った経緯が書いてございます。

全国的にも今非常に人数が増えていて、大きな問題になっておりますけれども、本協議会においてもこの問題をなんとかしていかなければという声が出ましたので、今回は、このテーマでやっていこうということを第１回の全体会で決めました。

その際に、多様化している要因を把握することや居場所等の確保などについてを重点課題としまして、より専門的にご議論いただくために「アプローチ手法検討部会」「居場所検討部会」という２つの専門部会を設けまして検討していくこととなった、そのような経緯が記載されているところでございます。２ページは今申し上げたようなことを落とし込んだ図でございます。

３ページ「第２章 提言の作成経過」ご覧いただけますでしょうか。提言が出来上がってくるまでの経過を３ページ以降記載しております。

先ほど申しあげました２つの専門部会を各４回行いまして、ここでかなりの議論をさせていただきました。

そして、全体会についても、今期のテーマ設定を行った第１回全体会から、第２回全体会において提言案の中間報告をさせていただいて、そして今回が第３回ということになります。

各会の内容については要約したご意見等を以降５ページまで記載しております。提言案の作成に向けてこういう経緯で検討してきたということをご理解いただければと思います。

その上で、６ページをご覧くださいでしょうか。今回の青少年問題協議会の取組におけるひとつの特徴だと思います。専門部会での提案を受けて、北豊島工科高等学校と大山高等学校の定時制の生徒さんにご協力をいただき実施したアンケート調査の結果でございます。

近年の子ども関連の計画や施策の策定においては、やはり子どもの生の声を聞くということが大変重要視されております。今回はアンケート調査の実施によりそれができたということとはすごく画期的なことかなという風に思っております。

アンケート結果の抜粋が６ページから７ページにかけて記載しておりますが、全体の結果については提言案の参考資料の２として記載しておりますので後ほどご確認ください。

次に８ページ「第３章「令和５・６年度板橋区青少年問題協議会」提言（案）」をご覧ください。ここからが、今回の提言案となります。

まず大前提として、板橋区ではこれまでも不登校に関わる様々な取組を行ってまいりましたので、そのことが基本としてあります。区取組の内容については同じくこの冊子の巻末の参考資料3でまとめていただいておりますので、こちらをご参考にしていただければと思います。

ですから、今回の提言案は、まるっきり何もなかったところから考えたということではなくて、これまでも様々な取組の中で行ってきたことをきちんと踏まえた上で、それをより実効的に効果にしていくためにはどうするかということで検討していただく、そういうことになるかと思います。

その上で、この提言の中身をまとめるにあたっては、重要となる前提要素として2つ、ひとつが子どもたちに安心、安全な環境を保障すること、もうひとつが子どもの権利を尊重するという、まずそのことを確認しまして、その上で「不登校の背景を的確に捉えた、多面的な支援の実現に向けて」必要なことについて協議を重ねました。その際に見えてきた共通観点としては3つ「つながり」「学び」「支えあい」、この3つの観点を軸に全体を整理すると、この取り組みがバラバラではなくて、全体としてどういう役割を持っているのかということが見えてくると、そういうふうを考えて発表してきた次第です。

先になります。11ページを見ていただきますと、下のところにイメージ図が載っております。3つの観点「つながり」「学び」「支えあい」の大きな土台のところには、子どもたちにとっての「安心・安全な環境」と「子どもの権利」があり、このような全体像の中で、合計9つの支援の内容といえますか項目についてここで申し上げているという次第です。

それでは、8ページに戻っていただきまして、9つの項目について詳細を説明させていただきます。

1つ目「積極的かつ継続的なアプローチによる情報収集【つながり】」です。まずは積極的に情報収集をしなくては何も始まらない。今から子どもたちときちんといろんな形でのつながりを持っていて、その子がどういう状態になっているのかということを知ることができ、それを把握できるようにする。そのために大人が努力するというのが第一にあります。だから、そういうつながりを作っていく、というのが1つ目です。

2つ目「支援情報についての積極的な情報発信と周知強化【つながり】」です。今度は逆に、そういう子どもの情報がわかったとしても、じゃあ、そういう子どもたちを支援する場所はどこにあるのか、どこでどんな取り組みがなされているのか、そういうことについても積極的に情報発信をして周知をしていかないと、多くの子どもたちがそこに行かない、先ほど申し上げた、アンケート調査結果を見ても、半分ぐらいの生徒さんたちは、自宅以外の場所があることを知らなかったってなっていました。

板橋区がこれだけいろんなことをやられているにも関わらず、やっぱりまだまだ知られていないってことがありますので、そこについては本当の情報発信と周知を心がけるべきであろう。その際、紙媒体等の周知等ありますけれども、同時にSNS等を通じての発信をしていくと、そういうことが必要でしょうということが2つめです。

3つ目「子どもの社会参加を促す機会の創出【つながり】【学び】」です。こちらがどういう内容を求めていくかという時に、子どもたち自身の社会参加を促すという、そういうところがすごく大事で、そのための機会を作っていく、ということなのです。

最終的に子どもたちが社会的に自立をしていくということが支援の目的ですので、そのためには様々な形で同世代や世代と関わる場を準備する、あるいは生徒たち、子どもたち自身

が自ら課題に向き合い成長する場を作っていく、そういうことを通じて社会参加を促していくということが必要ではないかということです。

4つ目「子どものニーズに応じた環境の整備【つながり】【学び】【支えあい】」です。子どもによっては、例えば学習ひとつ取ったとしても、自分のペースで学びたいとか、教室外で学びたいという子どももいますし、そういう子どもたち一人ひとりの多様性を踏まえた上で、学習の進度であるとかどこで学習するかということを自ら子ども自身が選択できるような、そういう環境を整備していくことが求められるでしょうということです。

5つ目「子どもの主体性を伸ばす魅力ある授業やプログラムの共有【学び】」です。子どもたちが興味関心を持ったことに関して、どのようにして子ども自身の主体性を伸ばして子どもの成長を促していくかということがあると思っております、そのためにはいろんな事業やプログラムを共有していく、用意していくことが必要であろうということです。

ここでは授業だけではなくてプログラムというふうに書いてありますのは、授業は大抵学校で行うことだと思いますが、それ以外でも様々なプログラムの提供がありえるわけで、そういうことも含めて子どもたちの学びの場を提供していきたいという、そういう趣旨だというふうにご理解いただければと思います。

6つ目「多様な将来設計への道筋創出【学び】」です。子どもたちの支援ということをするときに、やっぱり不登校状態にある子どもをみますと、将来どうなるのだろうという不安を抱えていますし、それは保護者の方もそうだと思うんですね。ですから、そういう多様な将来設計ができる方向での支援、その道筋を作っていくということもすごく大事なことで、そのための様々な体験活動や交流の活動、あるいは個別相談みたいな、そういうことを充実していくことも必要でしょうということです。

7つ目「適切な支援に向けての支援機関同士の連携強化と情報共有【つながり】【支えあい】」です。不登校の要因は複雑かつ多様です。適切な支援に向けての支援関係同士の連携強化ということですが、参考資料の3でもありますように現在でも板橋区では様々な機関が様々な取り組みをしているわけですが、それらが連携して結びついているかということ、その点ではまだまだ強化すべきところもあるかもしれない。そういう意味で、連携の強化と情報の共有、そういうことも図っていく必要があるのではないかと思います。

8つ目「子どもを支援できる多様な地域資源や人材の発掘【支えあい】」です。子どもたちを支援する上での地域の資源が多様に存在していて、そこには様々な人材の方々がいるということもすごく大事なことで、その資源や人材の発掘ということについても力を入れていくべきでしょうという、保護者や先生とは違う、第3の大人という存在はすごく大事で、そういうところをなんとか地域の中で豊かにしていきたいということでございます。

9つ目「子ども・家庭や支援者への活動支援【支えあい】」、最後になります。子どもを支援するのは当然なんですけど、実は子どもを支援する立場にある家庭や、あるいは学校も含めてですけれども、地域の中で子どもたちを支援している支援者、その方々の活動を支える支援も実は必要ではないかと、そういう議論をしました。実際に様々な多数の民間団体やNPO団体等が支援活動をしていますけども、人材であったりスキルであったり、あるいは活動事例であったりというところでいろんな困難や問題を抱えていることもありますので、そこを支援していくということも大事な話ではないかということで記載したところがございます。

以上、9つの項目についてご説明申し上げました。それが先ほど申し上げました11ページの下イメージ図をご覧のとおり、項目1から9までは「つながり」「学び」「支えあい」と

いう3つの観点ごとの単独項目ではなく、それぞれ重なっている部分があるんですね。そういうところを見ていただいて、こういう観点で既にある取り組みがあることはもちろんなんですが、それをより充実させていき、よりよいものに交換していくということが必要であろうという、そのような提言内容となっております。

12 ページです。こういう事業を展開していく際には、ここにあるような行動サイクルも必要ではないかと思われます。今回記載したAARサイクルについてですが、OECD（経済協力開発機構）の「Education2030 プロジェクト」で提唱されている考え方です。見通し、行動、振り返りという3つのサイクルを常に回しながら事業を展開していく、つまり、取り組み始める前においては、どういうところにニーズがあって、どういうことができるのか、あるいはどういうリスクがあるのかということをきちんと検討する。その上で、実際の支援を実行する。実行したら、それがやりっぱなしではなく、子どもの意見等も聞きながら、あるいは支援者、保護者の意見交換や情報共有をしながら振り返りをする。振り返りをする、より発展すべき点ですとか改善すべき点等々も見えてくるはずですので、そこから今度は次のステップに向かう見通しに変えていく。ですからこれは1回1回やったら終わりではなくて、ずっとサイクルを回っていくという形で支援をしていくことが必要ではないかということについても最後に書かせていただいているという次第です。

最後の13 ページ「おわりに」です。子どもたちは将来の板橋区を背負っていく人材ですから、彼らの社会的自立をどう果たしていくかということが極めて重要で、そのために、今回この提言に書かせていただいたような内容を取り入れた施策を板橋区が展開していくことで、全ての子どもたちが取り残されることはなく、これからの社会に出ていく力を養っていけることを期待したいということで本提言を提出するという結びの言葉としております。

以上、提言案の説明でございます。

坂本会長（板橋区長）

ありがとうございました。つづきまして「(2) 意見交換」に移ります。

児美川副会長からご説明のあった提言（案）について、ご意見あるいはご感想がありましたら伺いたいと思います。いかがでしょうか。

改めてご意見がないようでしたら、「アプローチ手法検討部会」部会長である平戸副会長から最後にご意見ご感想を伺いたいと思います。平戸副会長よろしくお願いします。

平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

よろしくお願いいたします。お時間をいただきまして、私からの感想と言いますか、意見も含めまして述べさせていただければと思います。

今回の提言案につきましては、率直に申し上げて、大変良い提言案と言いますか、とてもよくまとまったものが出来上がったなというふうに思っております。

正直なところ、自分も担当させていただいて、本当にどういう形で板橋区らしいものができるのか、先が見えない時期もございましたが、児美川委員をはじめとした委員の方々の非常に活発なご意見、また事務局の皆さんのご努力もありまして、本当にいいものが仕上がったなというのがまず真っ先に申し上げたいことでございます。

そのことをまず申し上げたうえで、何点かのご感想と、それから今後に向けての意見を申

し上げます。

まず、今回の提言の案でございますが、実際にアンケートを実施して子どもの生の声を反映させているという点が非常に価値あるものという風に思いました。

また、それぞれの部会に入ってくださいました委員の方々なども具体的な例を非常によくお伝えくださいまして、子どもの意見であるとか子どもの姿が反映される提言案になっているというのが大変優れているというふうに私が感じるところでございます。

また、ともすると提言の案というのは、大人の姿勢、あるいは上からとでも言いましょうか、そういうところが強くなりがちでございますが、今回、話し合いの経過の中で、実は3つのキーワードというのをどういうふうに表現するかというのは問題になった時期がございました。

委員の方々から活発なご意見を頂戴したところでございますが、当初、私が思い出す限りでございますけれども「学ぶ」「つなぐ」「支える」というような、どちらかという大人の視点で発するというようなキーワードで構成していた時期があったかなと思います。

ところが、このような提言の案として仕上がったものを拝見しておりますと「学び」あるいは「つながり」「支えあい」というような、大人も子どもも立場はフラットで実際の状態を表現する形にキーワードが変更された、このようなことも非常にいい提言のご条件の1つを今回は満たしているのではないかとというふうに思ったところでございます。

それから、3つのこの観点に加えまして、9つの項目もそれぞれ大人の視点から、あるいは子どもの視点からというふうに分かりやすく述べられておりまして、「共に歩む」という姿勢が見られているのも大変良いことだと思いました。

さらに私がいいなと思った点を申し上げますと、私自身は社会福祉の領域で仕事をしている人間ですけれども、まだ福祉の領域ではPDCAサイクルという行動サイクルが一般的でございます。

その中でよく言われることが、ともすると計画倒れになってしまうという、プランそのものはあるけれどもそこで力尽き果ててしまうというのが現実の問題として起こります。

今回はAARサイクルという子どもを主体とした行動サイクルを思い切って提言に取り上げているということも大変優れた点かなという風に思っております。

また前回の第4回専門部会の意見を経て、今回ここもきれいに反映されたと関心している点としまして、私の記憶にある限りでは、第4回専門部会での当初案は「学び」がまず前面に出てきていてすごく目立つ形の図式化だったように記憶しています。ところが前回の専門部会の意見を経て今回、概要版の図、あるいはこの提言案の11ページに書かれている図をご覧くださいますと、3つのキーワードの中で前に出てきたのが「つながり」なんですね。

要は、ネットワークとか協力し合うとか、結びついていくっていうあたりが前面に出てきたというのは、図式化の工夫も含めて大変素晴らしいと思います。

そのことに加えまして、あるいはそれ以上かもしれません、前回の専門部会の中でご意見として皆さんが非常に強く強調してくださったのは、まず何をめざすのか、そのための何のキーワードなのかということを明確に示す必要があるのではないかとというふうに皆さんがお話くださったことです。そしてそれが今回、この図の中で「安心・安全な環境」を作り、「子どもの権利」を尊重するという部分を土台として、もしくは囲むものとして図の中に表現をしてくださったということ、これが大変よかったなというふうに思いました。

子どもの権利ということ本当にたくさんございまして、守られる権利、どちらかというところ

の受け身の権利と、それから自らがこう発する権利というか、成長していく能動的な権利というのがあると思います。その両方をですね、ここは含んで考えることができると思います。

何かを教えるとかではなくて、子ども本人が多様な進路を自ら歩いていく、自分の人生、選んだり考えたりする過程があるんだと、そしてそれを支えていくんだというあたりですね。

そういう考え方も含まれて、この図の中にはきちんと、その子ども自身が成功していくというか、子ども自身が人生を掴んでいくというようなことがこの図の中には表現をしていたのかなと思って、非常に感謝している次第でございます。

しかしながら、この提言を作りましたで終わりではなく、実際にこの提言をどうやって実のあるものにしていくかというのが、これから努力を重ねていく必要があると考えますと、より良くなるためにこういうことも考えてはどうかということを結びに何点か申し上げます。

1つ目は、やはり今回は提言ということで、大きな、割とこう全てに共通するような言葉で、箇条書きと言いますか、包括的な表現でまとめられていることが特徴かなと思います。提言の形態そのものが一般的にはそういうものではないかと。

しかし、専門部会でのご議論の中で、私はアプローチ手法検討部会でございますけれども、その中でたくさんの委員の皆さま方の具体的な実践例をお聞きしました。成功事例ばかりではない、失敗も含めて、具体的にこういうケース、こういう背景のある子にこんなふうに声をかけていたらこうだったというような具体的な関わり方の例を教えてくださいました。そういうことが本当に貴重でしたので、この提言を具体的に進めていくために、支援例と言いますか、具体的なものがさらに出るようなことがあると、今後ますます実のあるものになっていくのかなというのが考えた1つ目でございます。

2つ目は、実は提言の案の中にも書かれてございましたが、支援する側の人材のことでございます。提言案の中で言いますと、10ページに書かれている7、8、9つ目の項目でございましょうか。特に9つ目などは新しい視点で非常に私はありがたいし、いいことだと思います。具体的に専門部会で支援事例などで伺っていると、個人の支援者と言ったらいいでしょうか、センスに具体的な支援の展開が任されていると感じることが実は何回かございました。結局、この人のセンスに頼っているから、この方が異動等でいらっしゃらなくなると次どうなるんだろうというのが正直なところ不安だという意見がありました。支援を進めていく時の要になるのは人でございます。そして人を発掘するだけではなくて、今できている人のスキルやセンスを、やはり次の人が吸収し、自分のものにしていくかというあたりですね、そのあたりの人材育成の視点も今後もう少し触れられていくといいのかなというふうに思いました。

最後のところは私自身の個人の感想でございますが、このような形で良いものを仕上げてくださったことに対して、心から感謝を申し上げます。長くなりましたけれども、私からの感想は以上でございます。ありがとうございました。

坂本会長（板橋区長）

貴重なご意見ありがとうございました。

それでは、令和5・6年度板橋区青少年問題協議会提言として、「不登校の背景を的確に捉えた、多面的な支援の実現に向けて」をお諮りしたいと存じますが、ご承認いただけますでしょうか。

（委員拍手）

ありがとうございます。ご承認いただきましたので、提言の（案）はお取り下さい。
ここで事務局から、提言の今後の取扱いについてご説明願います。

高木課長（地域教育力推進課長）

ただ今ご承認いただきました提言につきましては、板橋区へ提言書を提出させていただきたいと思います。

提言書の提出につきましては、本協議会を代表いたしまして、平戸副会長に提出をお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

坂本会長（板橋区長）

事務局から、提言の提出を平戸副会長にお願いするとの提案がございましたが、皆様いかがでしょうか。

（委員拍手）

ありがとうございます。ご承認をいただきましたので、平戸副会長に提言書の提出をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

これで、本日予定しておりました議事はすべて終了いたしました。そのほか事務局から連絡事項などありましたら願います。

高木課長（地域教育力推進課長）

ご承認いただいた提言書につきましては、（案）を取った正式な提言書を後日改めて委員の皆さまに送付させていただきます。事務局からは以上です。

坂本会長（板橋区長）

それでは、これをもちまして令和５・６年度板橋区青少年問題協議会第３回全体会を終了させていただきます。